

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

ニュースレター 8号



発行 ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

発行日 2009年9月1日

住所 滋賀県近江八幡市永原町上16

# 夏の企画展



2009年6月14日（日）～8月16日（日）

「顔」は、私たちが社会と結びつくために実にさまざまな役割を果たしています。時には言葉や行動以上に、私たちは「他者の顔」から様々な情報を受けとることもあります。

目、鼻、口とその要素は単純なのにもかかわらず、それらのカタチの変化によって「顔」は様々なメッセージや感情を見る人に与えますが、それはある意味「記号」のようではないでしょうか？

そんな「顔」に対する疑問から始まった今回の企画展は、10クラス分の女学生と先生に扮して集合写真にした澤田知子と、ひたすら同じ服装、同じ表情の「お母さん」を描き続けた芝田貴子から始まり、陶器も絵画も「目・目・鼻・口」の点の集合体を表現する吉川秀昭の3人を一階に展示、外に出て蔵には、学校のプリントの裏に顔が鏡文字となっている人物を描き続けた藤野友衣を展示しました。

2階に上がると、太く黒い線で流れるように人に近い動物たちを描いている鈴木藍、「志村けん」が大好きで、クレヨンの激しい塗り込みで描く平野信治を対照的な形で展示し、最後には、独特のデフォルメで人物を描く大久保寿を床の間などに厳かに展示を行い、7人のそれぞれの作家の表現を個々に鑑賞できるよう工夫しました。

また、ライブラリーコーナーも去年の岩崎司展以来の1年ぶりの復活。座りながら作品や本をのんびりと見つめ、お客様同士で意気投合し、作品の感想をお話されている方もいらっしゃいました。ライブラリーコーナーは、「顔」と「顔」を見ながら「顔」の作品について話をしてほしいという思いから設置していましたが、作品だけではなく、顔を合わせて話をする、人と人の触れ合いの大切さも感じていただけるような展示になったと思います。



「顔」展関連イベント トークショー

# テーマ「顔は誰のため？」

小林昌廣氏（情報科学芸術大学院大学メディア文化センター長・教授）

2009年7月11日（土） 野間清六郎

（抜粋）

発達心理学のある実験で、赤ちゃん（乳児）にお母さんが色々な表情を見せると、瞬時にして、その表情を真似ます。すっぱい顔や、眉間にシワを寄せた怒った顔、笑顔など、表情が伝染して行きます。学生時代に、お母さんの顔とそれを見た赤ちゃんの顔がどれくらいの時間で一致していくか観察したことがあります。この実験はお母さんじゃないとダメ。お父さんじゃ全然真似てくれません。お父さんはこの実験をやると必ずいつも悲しい顔をしてしまう。だって自分の子がちっとも真似てくれないから。ナースやお医者さんや、僕ら学生でもダメ。ずーっと見てはいますよ、顔の表情を。でも真似はしない。

顔の中で特に動くのは目と口で、お化粧品でもアイシャドーや口紅を子供が最初にいたずらして塗ってみる。赤ん坊でも一番動くところをちゃんと見ます。脳科学の世界で、ミラーニューロン、鏡としての神経細胞、頭の中には鏡のような神経細胞がたくさんあると考えられていて、それは、外部にあるものを映しています。それを頭の中で模倣できる。誰かが蕎麦を食べるのを横で見ていて、自分は食べていなくても、頭の中で模倣して、いざ蕎麦を食べる時スムーズに食べられるというものです。だから、やったことが無い事でも、様々なパターンがインプットされていて、それが実際の行動に出る時に、外を見るのではなく、自分の頭の中の鏡を見ることによって、行動が実現できる。赤ちゃんもいくつか表情のパリエーションがインプットされていて、お母さんの時だけ反応しているのかもしれない。生後4週間くらいですでに表情ができあがるという例もあります。表情筋というものはだいたい26種ほどありますが、赤ちゃんはまだ全部はできていませんが、すっぱい顔なんて見事に口をとがらせて目をつぶっています。そんなに羊水の中はすっぱかったのかというくらい。そういう関連から、赤ちゃんの表情から母子関係もうかがいすることができると着目されているのです。

（抜粋）

顔は、誰のためってほどちゃんとしたものはないですが、顔がさすとか、顔を立てるという言葉がありますが、それは、対社会的な、対人的なものとしてあるんだということです。昔は、主体と客体とか主観と客観とか自分と自分でないものとはっきり区別したんですが、今は逆に、自分じゃないものがあるから自分がいる、他者がいるから自己がいるという考えによって「顔」というものが成立しているのではないかという話なのです。

三島由紀夫が新宿にある美容形成外科を訪れた時の良い文章を書いて、「表面だけ変えて何になる」と思って取材したが、そこで感じたものは「一番浅いところを知る事によって、かえって最も深い所の重要な部分が見えてくるのではないかと」。「ザイン（存在する）よりシャイネン（そう見える）」と書いてあるのですが、つまり「どのように見える事」が重要であることを言っている。健康より健康に見える事が重要な時代が来るだろうと、半世紀近く前に予言しているわけです。本質を見せるよりも本質っぽく見えればいい、そのように見えればみんな納得するという、顔でも体でも何層にも武装して社会に出て行く、それはまさに今の日本の文化を象徴しているのではないのでしょうか。

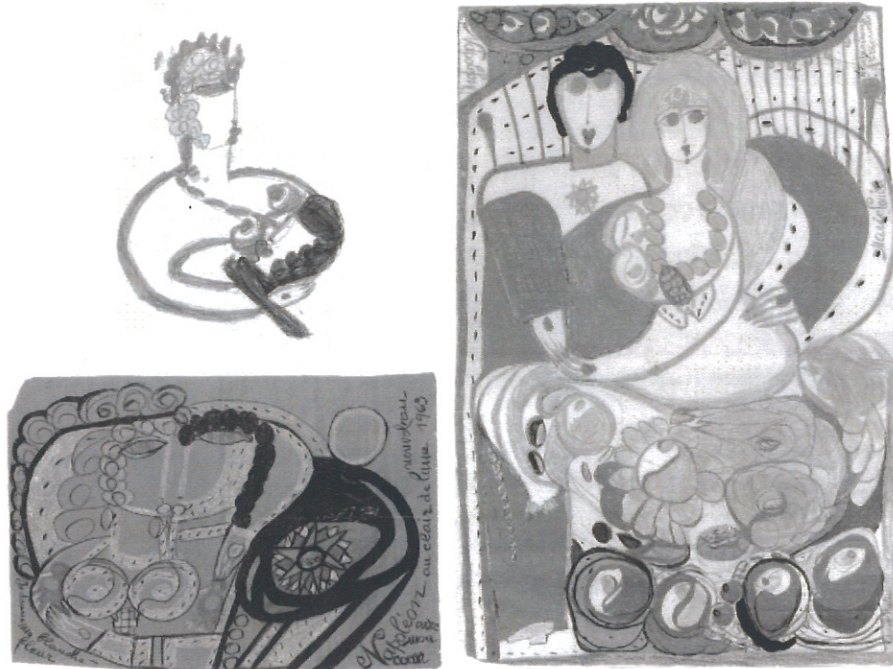
いったい顔が誰のため？と聞かれたら、「誰のため？」って相手に聞いてみて、相手の不思議な顔を見ると、「ああやっぱり自分のためではないのだな」と分かると思うのです。常に相手に「誰のため？」と問い続ける教訓の言葉として今日のタイトルに致しました。



# アロイーズ

私の愛は蝶のように飛び去った…

2009年2月3日(火)～3月29日(日)  
〈第一会場〉NO-MA



日本初のアロイーズの大規模な巡回展覧会は、NO-MAから開催されました。とても印象的だったのは、14メートルにも及ぶアロイーズの大作を展示する作業中、ジャクリーヌ・ボレ＝フォレルさんは何時間もそれに立ち会い、感慨深げに見られていることでした。自宅の床に広げて見るしか手段が無かった彼女にとって、壁に飾られた状態は初めて見るものだったのです。

この未発表作品が公開されることは、50年にも及ぶジャクリーヌさんのアロイーズ研究が日本で花開いたことを意味していました。

アロイーズ展ではあと2つ素晴らしい成果を残しています。1つは図録です。3ヶ国語で翻訳されており、ジャクリーヌさんの論文やデュビュッフェの文章、アール・ブリュットの研究者が勢揃いした充実の内容の労作です。

フランス語以外の図録は作られた事がないので世界的に見ても価値の高い参考文献と言えることでしょう。残る一つはスケッチブック。これはアロイーズの描いた未公開のスケッチブックの完全複製本です。日本の印刷技術は世界一と言われるだけあって、並べて見ても質感から色合いまで本当にそっくりに出来上がっています。展覧会をご覧になった方はオリジナルの横で複製本をめくって多くのページをご覧になれたかと思います。

貴重な資料を展覧会に合わせて作り上げていくことが出来た事は、今後のアール・ブリュット研究に大きな足跡を残す事が出来たと言えるでしょう。

展覧会は多くの人に作品を見ていただくために開催するわけですが、今後のために正確な資料を作成する事も重要な役割となります。

NO-MAでは好評にて展示期間を延長するほど人気の展覧会となったアロイーズ展は東京のワタリウム美術館で開催され、秋には北海道立旭川美術館で展示されることになっています。

それぞれ展示方法を変え、様々な角度からアロイーズの芸術を見られるよう工夫しています。是非、日本の多くの方に見てもらいたい展覧会です。



アロイーズ展と同時開催のこの展覧会は、日本精神看護技術協会と当ミュージアムとの連携による作品調査事業の中から発掘された作品群によるものです。

今までその発見の糸口が困難だった精神障害のある方々の優れた作品展の本格的スタートともなる本展は、代島治彦氏の現場撮影による映像と共に、強いインパクトを与えた企画となりました。

「アール・ブリュット」という概念は、障害者の芸術を指す言葉ではありません。しかし後に「アール・ブリュット」を命名し、その作品の発掘収集に情熱を傾け続けた美術家ジャン・デュビュッフェの活動期の前後1920～50年当時、主に精神に障害をおった人々の表現の発見がメインであったことは事実です。そして彼らの作品に対して新しい価値評価をもたらしたこの概念は、「表現」というものが人間の心の深層に眠っているイメージの豊かさや不可思議さに光をあてることになったのでした。

当然のことながら、日本にもそのような作品は存在します。韓国から1名、日本から4名の作品で構成。期間中は企画者によるギャラリートークや、精神看護学の末安民生先生(慶応義塾大学教授)によるトークなどを開催し、多くの観客が非現実世界の夢に、並々ならぬ関心と共感を示されました。

また、この企画は7月4日～26日まで、東京の0美術館に巡回され、末安民生先生や作家田口ランディさんによるトークショーも開催されました。



# 目覚めぬ夢

～日韓のアール・ブリュットたち～

2009年2月3日(火)～3月29日(日)  
〈第二会場〉旧吉田邸



# 次回開催展覧会 イベント案内

第6回滋賀県  
施設合同企画展

ing... ~障害のある人の進行形~

休館日

・月曜(月曜祝日の場合翌日休館)  
・年末年始12月28日(月)~1月8日(金)

会期 2009年9月5日(土)~  
10月12日(月・祝)

今年で第6回目を迎えます「滋賀県施設合同企画展ing...障害のある人の進行形」。

新たな顔ぶれも加わり、県内19施設、県外2施設と合計21の施設が集まり、障害のある方から現在生み出される作品を展示します。

今までも、作品の選定は自由(担当者が面白い、素晴らしいと思うもの)だったのですが、今回はそれに加え、作者その人が存分に表現されている作品(その人独自のルールにのっとったもの)に焦点をあてました。

ヒョロツとしたか細い紙飛行機にこれまたか細い足が付けられた立体作品、1mm程の陶で作られた砂、一ヶ月分の昼食を丁寧に書かれた献立表...等々。それは、日々の中で、着々と積み重ねられた揺るぎない形跡。

一見すると、あまりにも独走的で日常的で「これが作品か!？」と見過ごされそうですが、よくよく観ると、よくぞこのルールをあみだした!と思うような表現がぞくぞくと展示されています。どうぞ御覧下さいませ。

関連イベント

・オープニングイベント

日時 2009年9月5日(土)13:30~14:30

内容 出品作家、造形担当者によるギャラリートーク

定員 20名 参加費 無料

・ワークショップコーナー 常時開催

2階ライブラリーコーナーにて

「365日のこんだて記念日~お昼ご飯ナニにする?」



社会就労センターあおぞら 飯塚政隆

・クロージングパーティー

2009年10月12日(月・祝)14:00~15:00

内容 ガムランコンサート[出演:HANA★JOSS]

定員 20名 参加費 無料(要予約)



社会就労センターこだま 中野裕太

## 地域交流事業「八幡山に天狗を探せ！」

2007年から行っている地域交流事業ですが、今年八幡山をベースにした「八幡山に天狗を探せ！」を行います。八幡山は、市街の北側に位置し、標高271.9m、鶴翼山とも呼ばれています。今回はそんな八幡山を散策しつつ「天狗」にまつわる企画を2009年8月~2010年3月までの四季を通して行う、1年プロジェクトになります。

1回目はこの夏、8月30日に「天狗の住処」というテーマで、八幡山の竹や、自然のもので天狗の住処を作りました。

その後は秋「天狗絵巻」、冬「天狗の紙芝居」と続き、最後の春には「大天狗展」として2010年3月13日(土)~3月21日(日)まで、当ミュージアムで1年間の試みを一挙に展示する予定です。

地域交流事業ではありますが、近江八幡市外の方の参加も大歓迎!各企画定員30名、予約が必要となります。(先着順)興味がある方は当ミュージアムにお問い合わせください。

第二条 秋

「天狗の絵巻」之巻

決行日 2009年10月18日(日)

第三条 冬

「天狗の紙芝居」之巻

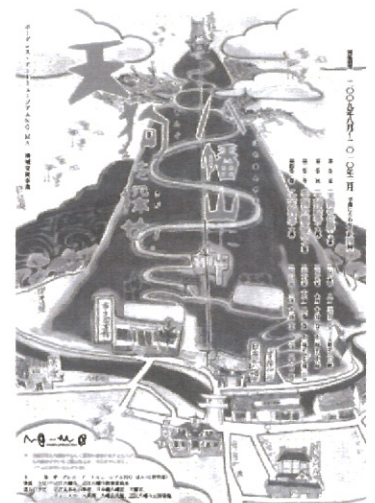
決行日 2009年12月20日(日)

第四条 春

「大天狗展」之巻

決行日 2010年3月13日(日)~21日(日)

\*会場又は詳細については、当ミュージアムホームページにて随時ご案内していきます



## 秋の特別企画展「この世界とのつながりかた」

会期 2009年10月24日(土)~2010年3月7日(日)

会場 尾篋商店にて同時開催

ネット文化の興隆や生活基盤の崩壊など、ドラスティックな変化の中で、私たちは、自分が生きているはずの「この世界」とはいったいなんなのか、自信を持ってなくなっています。

そんなとき大事なものは私たちの内側にも「この世界」は広がっているのだと思ひ出してみることです。そして、生きるということは、ふたつの「この世界」をすりあわせていくことではないかと考えてみるということです。

この展覧会には、そのような営みを粛々と続けている人たちを紹介しています。彼らの作品は、この世界を(美しさを潜めているがゆえに)積極的に肯定しようとする強さに満ち溢れていて、私たちが失いつつある自信を回復してくれるはずで

出展作家

秋葉シスイ

奥村雄樹

川内倫子

仲澄子

橋口浩幸

松尾吉人

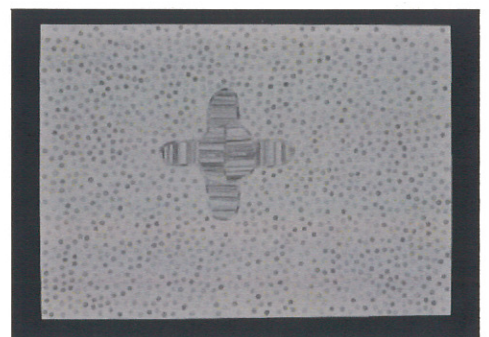
松本寛庸

森田浩彰

企画

保坂健二郎

(東京国立近代美術館研究員)



乱舞...星 松本寛庸 /2008